

考するのである。)

さて、「教学」と「宗学」の使い分けから考えて見ると以上のような本書の構成についての理解は誤りではないと思ふのであるが、全体は、各章ごとに或は節ごとに敘述された論文の集積であつて、非常に細かく論がすめられている。先生の「教学史上の問題」(一〇頁)の分類に従えば、宗教の問題としては本迹問題が中心であらうし、宗旨の問題としては本尊論(本体論・形態論・本仏論・顕本論)、題目論(本体論・信行関係論・三業傍正論)、戒壇論(事理戒壇論等)、成仏論(受持即成論・来世成仏論・靈山往詣論・三益論)等が中心であらう。いわば、行の所対やありようをめぐるさまざまな問題が、先生の眼によつて尋討されていると思ふのである。従つて、随所に鋭い批評がちりばめられており、教学の本質がえぐり出される。例えば、大石寺日寛を評して、「師等石山の教学は概してその法門構成と所用の法相が独断的珍奇のもの多し。第三法門の解の如き、三衣の義の如き、特に名儀が本因妙抄・百六箇条に出でたるものなりと雖も、甚だ内容なき好奇的文字なり。」(六四八頁)と述べ、以下八項にわたつて批評を加えている。

以上、本書の構成の特色を中心に若干の紹介を試みたつ

りである。望月宗学は本書のごとき基礎的作業あつてその堅牢を誇るものであらう。本書は近代宗学において燦然と輝く金字塔であり、宗学を志すものが必ず立ち入らねばならぬ業績である。(平楽寺刊) (渡・辺・宝・陽)

## 近代日本の法華仏教

望月 敏 厚 編

明治百年に當つての諸行事が官製であることの賛否は別として、近代日本の文化に対する関心が高まってきたことは事実である。ことに現在の思想混乱のときに當つて、日本の伝統的思想を見直そうと、中でも仏教思想に対する再評価の傾向が見られ、多くの業績が発表されている。しかしながら、法華仏教に関する限り、問題の複雑さ等から研究はやゝ立遅れの感があつた。それが多くの新興宗教の母胎となり、今日では単に宗教界に止まらず、社会的関心の的となつているとき、その研究の發展と成果の発表が待たれてゐた。このときに『近代日本の法華仏教』の完成を見

たのは、宗教界・思想界に寄与する所大なるものがあり、時宜を得たものと喜びに堪えないところである。

この書は望月歆厚博士を代表者とする総合研究「近代日本における法華仏教の展開」の成果として出版されたものである。先年刊行された『法華経の思想と文化』（坂本幸男編）が、法華経の成立から日蓮教学に至る法華経文化の生成発展の過程を論究したものであったのに対し、本書はその成果を踏まえながら、特に近代日本における法華仏教の展開の種々相を、歴史的、教理的、思想的各方面から検討した、二十三氏の論文が集められている。以下、各論文を紹介していくが、筆者の能力から全てを紹介することが出来ないことを、初めにお詫びしておきたい。尚、表題の「近代」とは明治維新から昭和二十年までをさすが、論者とテーマにより多少前後することがあるのは言うまでもない。

まず序篇には「法華仏教の特質」として、「仏教学と法華経」（宮本正尊）、「宗教学からみた法華思想」（石津照麿）、「法華経と日蓮教学」（望月歆厚）の三論文が収められているが、これらは総論ともいべきものである。

第一篇は「近代法華仏教運動の展開」として、歴史的立場からの五論文が収録されている。まず、「日蓮宗教団の

展開」（影山堯雄）において、明治・大正・昭和の三期に亘る日蓮宗教団の動向が概観されているが、ここに引用されている豊富な資料は今後大いに活用されなければならない。次の「田中智学の宗教運動について」（渡辺宝陽）は近代教団史上に異彩を放つ田中智学に関する論述である。明治維新前後の排仏毀釈の打撃から立ち直ろうとする宗門内外の教団革新運動の中であって、宗門を離脱して在家仏教運動を展開していった田中智学の活動は、日蓮聖人の宗教を近代社会形成の精神として探究し、宣伝していこうとするものであり、それは後に展開される国体学と相俟って、日蓮門下教団のみならず仏教界・思想界に大きな影響を与えたのであった。論者はこの田中の宗教活動を、蓮華会―立正安国会初期・立正安国会充実期・立正安国会後期―国柱会の三期に分けて、『宗門之維新』『本化撰折論』に示された基本理念を實踐して行った彼の運動の跡を辿ることにより、田中の教団近代化の試みを明かにしようと考えしている。田中の約国判重視から導出された国体学に対し、日蓮教学の立場から検討を加えなければならぬのはじめ、彼の思想が種々の問題を孕んでいるとしても、今日既成教団の何れにも共通する教団・教学の近代化という課題を抱えている日蓮教団にとって、論者も結語に提言してい

るように、田中の理念と実践を今日の時点において再検討し、今後の方向付けに資する必要があるのではないだろうか。

「創価学会の出現と問題点」（浅井円道）は、法華仏教の系譜に連る多くの新興宗教の中から、特に創価学会を上げ論究したものである。執筆者は学会の発展段階を、牧口常三郎の価値論を基調とした半教育半宗教の思想運動の段階（昭五一一九）、戸田城聖の生命哲学・正宗教学を根幹にした組織的宗教運動の段階（昭二〇—三三）、池田大作の公明党を分身にした二重組織によって王仏冥合をめざす宗教的政治運動の段階（昭三三—現在）と、会長交替によって三期に分け、それぞれの時代の問題点として、その指導理念を表わす『価値論』『折伏教典』『政治と宗教』の三書を選び出し、日蓮宗学の立場から検討を加えている。そして、価値論が人生を善導し得る思想であるかどうか、宗教的行爲の目的論たり得るかどうか、日蓮教学を歪曲していないかどうかと問題点を挙げてその歪曲性を批判し、折伏教典の生命論と本尊論・本仏論についてその曲解を難じ、政治と宗教について王仏冥合論や国立戒壇論が、宗祖の立正安国の精神に悖るものであつてはならないと、三書の主張を要約しながらそれぞれの問題点を鋭く摘出し

明快な批判が加えられている。ところで、最近の創価学会は、宗教革命（立正）は一応の目的に達したとし、その分身である公明党による政治革命（安国）によって王仏冥合を達成しようとしている。そして折伏中心主義から社会、政治に密着した労組・文化運動を重視し、かなりの伸び方を示している。ここでは宗教が政治の道具に使われている感がある。創価学会・公明党の政教一致主義が日本国憲法に合わない時代遅れのものであることは言うまでもないとしても、われわれはその体質の本質にある二面性を見究めその論理のもつ非客観性を批判しなければならぬ。近く（昭四六）開校される創価大学の理念は未だ明されていないが、現在の主張からおよそ推測されるのであり、その意味でもここに指摘された問題を更に追究し、批判を強めていく必要がある。

次に近代法華仏教の諸信仰の中から、七面信仰と妙見信仰が取上げられ、その形成過程と実態が考察されている。すなわち「七面山信仰の形成」（里見泰穂）と「近代における妙見信仰」（野村耀昌）とがそれである。

第二篇「近代法華仏教思想の展開」には、教学的問題を論究した八論文が収められ、二章に分れている。第一章は「日蓮教学の展開」で、まず「近代日蓮教学の形成」（執

行海秀)において、近世宗学の大成者優陀那日輝の充治園教学が日薩等により宗門正統教学として教権化されていく過程とその系譜が辿られる。そしてこれに批判的な田中智学・清水梁山等の反充治園教学の擡頭、特に智学―山川智応による本化妙宗教学の樹立と、梁山―高橋善中の法華神道・天皇本尊論の王仏一乘教学組織化、更にこれらに対して充治園教学の祖述者を以て任じた清水龍山による大崎宗学の形成に至る近代日蓮教学史が、時代的社会的背景を考慮しつつ概観されている。次に今日でも宗門内外で論議されている本尊問題について、特に田中智学と本多日生に焦点を合わせて論究したのが「本尊論の展開」(茂田井教亨)である。日輝宗学に対する批判として展開された両者の本尊論を、宗学性の問題、論理性の問題、宗教性の問題の三つの観点から比較考察したものであるが、単に本尊論に止まらず両者教学の本質と限界が指摘され批判されている。これに対し、日輝から智学への撰折論の展開を跡付けたのが「近代における撰折論の展開(室住一妙)」である。

折伏立教は永遠にわたる綱領であるとする論者は、日輝の「立正安国は一時の権巧」の主張を謗言であるとし、智学の法国冥合の折伏侵略主義にも内省の欠如を指摘する。撰折論は宗学における重要な問題であり、破邪顕正の実践の

倫理体系としたところに宗祖の宗教的特質があり、それは宗祖の立正安国の願業達成のための宗徒永遠の課題でもあろう。今日におけるこの問題を吟味し考えるために、前記の渡辺・浅井・茂田井論文と併読することをお勧めしたい。

「日蓮教学と天台教学との交渉」(日比宣正)は、天台学の立場から日輝教学の形成に智嶺・湛然の教学がどのように影響しているかを探り、智嶺・湛然の著述に遡って日輝の二師批判の妥当性を検討し、そこから日蓮教学の独自性を把握せんと試みたものである。

「日蓮聖人遺文の文献学的研究」(宮崎英修)は、録内御書成立について、まず偽・類似遺文成立の背景と実例を挙げ、次で先師の諸見解を検討した後、身延・中山の交誼破綻の明徳元年(祖滅一〇九年)以降、宗旨名目成立の寛正二年(祖滅一八〇年)に至る間、祖滅百四、五十年頃一応形が整い、漸次一般に知られるようになったと推論している。ここに初めて紹介された小湊本目録をはじめ、引用されている豊富な資料と研究史の回顧とは、今後の祖書学研究者に資するところ大なるものがあろう。

第二章の「日蓮論の展開」は、近代日本において日蓮聖人がどのように受けとめられ、どのような日蓮聖人像が構成されてきたかを論究している。まず「近代の日蓮論」

(高木豊)は、教団外の人々が描いた日蓮聖人像の中で知識人のそれがいかなるものであったかを、高山樗牛の場合について考察したものである。これに対し、諸外国における日蓮聖人研究の状況を紹介したのが「欧米人の日蓮観」(塚本啓祥)であり、ここではG・ルノンドーとW・コーラーの研究が紹介されている。そして、近代文学において日蓮聖人がどのように理解され表現されているかを、小説・詩歌の分野に探究したのが「文字・芸能に現れた日蓮聖人」(上田本昌)である。

近代の教団外の人々における日蓮聖人理解は、知識人と大衆とを問わず(高山・内村の場合は別として)、必ずしも正当なものとは言えないものがあり、そして今日に至るも未だに誤解と中傷に纏れた聖人像が見られるとき、現代に生きる真の日蓮聖人像を人々に知らしめることが必要であり、現下の急務であると痛感される。それは教団人全てに負わされた責任であるが、同時にそうした「日蓮論」の出現を待望する。

第三篇「近代における法華経研究」には法華経の文献学的・思想的諸問題を取り扱った七論文が収められている。

「近代仏教学における法華経原典の研究」(金倉円照)はヨーロッパにおける法華経研究の成果を、ホジソンの法華

経写本のヨーロッパ紹介、ピュルヌフの仏訳、ケルンの英訳と研究史的に概説されている。「近代中国の法華経疏の研究」(坂本幸男)は宋・元・明代の法華経注釈書について簡潔にその内容と特色を解説し、特に徳清の法華経観が詳細に考察されている。「近代日本における中国法華教学の研究」(丸山孝雄)は、近代において中国法華教学がどのように研究されてきたかを、嘉祥大師吉蔵に焦点を合せ法華経観の評価、その法華教学史上上の地位等について、多くの先学の所説を整理し検討したものである。

「法華経批判論の系譜」(勝呂信静)は、近代の法華経の思想的価値に対する批判の源流は、近世江戸時代に発した批判における発想法も一つの類型として近代に伝承されたとみて、その原型として富永仲基・服部天遊・殿村常久・平田篤胤等の儒者国学者の所論を要約し、問題点を上げ考察を加えている。

「法華経成立論の展開」(佐々木孝憲)は、近代における法華経梵本の発見以後に興った原典に対する文献学的批判的研究は、従来の宗派的伝統的經典観を否定するものであった。そうした近代仏教学における法華経の成立論について、提婆品・普門品重頌偈・囑累品の位置等に関する形態論からの成立論と、法華経自体の批判的研究によって原

形を探ろうとした松本博士以下の成立論の展開が紹介されている。

「一乗思想解釈の展開」（中村瑞隆）は、一乗經典の代表である法華經自体に、一乗・三乗についての明瞭な理論的説明がないことから、法華經に対する三一権実・三車四車等の諸種の異解が生じたとして、天台・嘉祥・慈恩・賢首の三・四車論についてその問題点を指摘し、更に近代の松本文三郎・木村泰賢・吉田龍英・布施浩岳・鈴木宗忠等諸氏の三・四車論を検討して、そこから法華經の原思想を探ろうとしたものである。

「授記思想解釈の諸類型」（田賀龍彦）は、法華經述門の主要思想であり、その相当部分を占める二乗授記に対して、どのような解釈がなされているかを、印度の支那・日本と三國に亘る法華教學史の流れにおいて論究し、その意義の変遷を跡づける。

以上、第三篇所収の諸論文は、法華經に関する種々の問題について、近代仏教學の成果に立って論究したものであり、また相互に関連した問題を扱っているものもあり、現在の学界の水準を知るにも一読すべきであろう。そして、ここに注記、附記されている豊富な文献資料は多くの研究者を利するであろうし大いに活用されるべきである。

（平樂寺書店刊）

小松邦彰

## 近代日本の宗教と政治

中 濃 教 篤 著

現宗研の顧問である中濃教篤師が『近代日本の宗教と政治』を世に出された。本書は宗教と政治及び教育の問題、戦争と平和の問題を座標軸にして、近代宗教史の歩みをまとめたものである。前近代の宗教史に比較して、近代のそれ（特に仏教史）は最近研究が一段と進んだとはいえ、その成果はまだ不十分であり、種々な角度から考察を加え、深めねばならない現状にあるといえる。しかも、近代宗教史研究は、単に研究をまとめるだけでなく、そこには宗教の未来への展望と現状批判に根ざす問題視角が設定されねばならず、いきおい現時的、実践的な視野が要請されてくる。そこではまた、従来の護教的宗派的考察の範囲を越えて、広く社会構成体のモメントとして宗教を位置づけ、歴史の視野に宗教を投影させて、宗教の現時的諸形態を再